大川美術館ニュース

ガス燈

第149号

2026年月8月18日発行
公益財団法人　大川美術館
〒376-0043　桐生市小曽根町3-69

野見山暁治《静かな日》1987年

ことば　149

いったいエカキとは何なのか。画面に向かっていることが、取りも直さずその疑問を問いつめていることであり、生涯問いつめてゆくその所業を、そうした人間の在りようを、エカキと称んでいいのではないかと私は思っている。

（野見山暁治「エカキ」『四百字のデッサン』河出書房新社 1982年）

企画展「野見山暁治―空にあそぶイメージたち」に関連して、一般財団法人 野見山暁治財団の事務長・山口千里氏と理事長・上葛明広氏の対談を開催いたしました。本号ではその内容をご紹介いたします。

対談【野見山暁治を語る】
山口千里氏×上葛明広氏
（一般財団法人 野見山暁治財団）

日　時：2026年5月16日（土）14：00～15：30
会　場：大川美術館展示室2

小此木美代子（当館学芸員）：

では、対談の会を始めます。学芸員の小此木と申します。全体の進行を少しさせていただきたいと思います。

今回の展示ですけれども、野見山暁治財団様から25点の水彩・デッサンを2年前に大川美術館にご寄贈いただきました。その初お披露目ということも兼ねて、今回全約40点による野見山暁治展を開催することができました。野見山先生はアトリエが練馬と福岡の糸島にありまして、そちらを行き来するような形で絵を描いてこられました。この度は、練馬区立美術館様のご協力も得て、各時代の野見山先生の油彩作品も交えての構成となっております。

今日この対談にはお二方お招きしました。上葛明広さんと山口千里さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

田中淳（当館館長。以下、田中）：

大川美術館の田中でございます。今日の対談の進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。今日は1番バッターは上葛さんだと思っていますので、上葛さんの方からちょっとお話をしていただこうかと思います。それと申しますのは、年譜でご覧いただくとおわかりのように、野見山暁治さんは1968年、昭和43年に東京藝術大学絵画科の助教授に着任されております。そして、1981年に退官されて、その後客員教授ということで、また長く勤めていらして、83年まで東京藝術大学にいらっしゃる。その間ですね、今日お一人目の上葛さんはちょうど大学に入られて、大学院へ進まれて、さらに野見山教室の助手をされていたということで、その当時のお話を特に野見山さんの絵画制作にわたって初めにお話をしていただこうかと思っております。(1)

1950年代の造形について

上葛明広氏（以下、上葛）：

僕は東京藝術大学大学院のあと野見山先生の助手になりました。先生が50歳代ですよね、僕は30歳代と思うんですが、その頃先生と絵の話をしたことを少しまとめて話したいと思います。先生が病気になり軍隊から帰られ、その後元気に回復された戦後から52年にパリへ発つ前ぐらいの話と、特に51年制作の《廃坑(A)》という絵が福岡県立美術館にあるんですが、その辺までの絵の話をしたいなと

(1) 対談風景（右から上葛氏、山口氏、田中館長）

(2) ポール·セザンヌ《大水浴図》1900–1906年
フィラデルフィア美術館蔵

(3) エル·グレコ《悔悛するマグダラのマリア》(部分)
1580–1585年頃　ネルソン·アトキンス美術館蔵

思っています。

戦後、46年に四国から福岡に今西中通さんという絵描きがやってきました。その画家はセザンヌやキュビスムに詳しい人でもあり、先生と付き合いが始まりました。先生によるとセザンヌの画面構成とかを改めて意識し、近代絵画にずいぶん目が開かれたとのこと。そこに一つの転換があると思うんですね。それまで先生は学生時代からフォーヴィスム、萬鉄五郎とか村山槐多とか、あの辺の絵がすごく好きだったって書いていますが、戦後今西さんと付き合って、セザンヌに目覚めるって変ですけど、改めて見直し研究していったことだろうと思います。(2)

今西さんのセザンヌの話で、元を辿ればセザンヌはエル・グレコなんですね、元々影響を受けたというか、影響かどうかはちょっとわからないんですけど、セザンヌ自身もグレコに傾倒しているわけですね。そういう話をたまたま僕が先生の家に夜泊まった時にしていたら、グレコの画集を本棚から出してくれて、見せてくれた。グレコから自分がこういう影響を受けたとは言わないですけど、こういうことが面白かったんだというような話をだいぶ聞きました。

今回の展覧会でたまたま展示されている野見山先生の描いた頭蓋骨の絵はグレコとの関係から制作されたのではないかと思います。((3)はエル・グレコが描いた頭蓋骨の絵) ちょうどその頃、先生の妹さんが九州大学の医学部に知り合いがいたか何かで本物を借り出す訳ですね。そして頭蓋骨を何点か描きました。今回の展覧会に出品されている頭蓋骨の小品の絵はその頃描かれた一点です。もちろんその時セザンヌやグレコのことを意識されていたと思います。

戦後、僕らはちょっと戦争のことはわからないんですが、やっぱり相当な悲惨な跡の状況があって、東京に出てきても結局、先生の田舎は炭鉱町なんですけど、人工物とそういうものが絡み合った町なわけですね。セザンヌを知って、自分の田舎っていうのは、そういう構築された人工的な自然だったっていうようなことを書いています。それで俄然、炭鉱のスケッチ、取材を始めます。何度か東京から田舎へ戻ってデッサンしたということも書いてあります。

先生が60歳ぐらいの時、退官記念展がありました。当時、自分の郷里に帰って描いた炭鉱のデッサンが100枚近くありましたけど、それを並べました。先生もあの時、「初めて袋から出して見る。久々に見るんだ」と言っていました。それぐらい、量的にその4、5年すごく集中して炭鉱の絵を描いていたと思います。その中で、個人的にこれが一番集大成かなと思っている絵なんですが、確か51年、《廃坑》A、Bとあるんですが、《廃坑(A)》という絵です。(4) これは福岡県立美術館にあります。グレコのこの絵の部分が(5)、大きいものと小さいもの、そういう特徴があります。人の周りの円形の中にポツンと1人入れるというそういう空間の持っていき方っていうんですか。真ん中に一つものがあって、画面に力が集中するというか。この絵を見た時、この辺から先生もグレコを意識されたのかなと思っていました。グレコの空がちょっと意識されていますよね。先生はヨーロッパへ行って、色が使えるようになったみたいなことを書いていますが、最初の1年間は油絵を描く気がしなかったと言っています。2年目に描こうとしたら、日本から持ってきた絵の具がまったく使いものにならなかったというようなことを書いてらっしゃいますね。だから、ヨーロッパ

(4) 野見山暁治《廃坑（A）》1951年 福岡県立美術館蔵

(5) エル·グレコ《聖マウリティウスの殉教》（部分）
1580–1582年　エル·エスコリアル修道院蔵

に渡った1年って、すごい転換期だったんだろうと思います。戦後はヨーロッパもセザンヌ研究が盛んな頃でしたから、先生は真髄をきちっとわかってヨーロッパに行かれたんだなと思っています。その頃50年代はちょうどフランスの哲学、サルトルとかね、メルロ・ポンティとか、セザンヌのことを評価する論文がいっぱい出ていた頃なんです。先生はそういうことを自分では言いませんでしたけど、自分の周りがそういう哲学というか、そういう時代だったってことを、身近に感じていたんじゃないかと思うんです。だからますますそういう自分がやってきたセザンヌみたいな近代絵画のことを深められたのではないだろうかと僕は想像しています。

今回の展覧会の題名に「空にあそぶイメージ」ってありますけど、僕が学生の頃、シャガールのことがちょっと気になっていました。キュビスムっていうものの、ピカソみたいにどんどん形を崩していって線と点になるようなものと、シャガールみたいに顔とか実体があるみたいな。そういう二つのキュビスムがあると思っていて、シャガール的キュビスムが面白いなと個人的に思っていたものですから、そういうことを話したら先生もシャガールを意識していたことを話されました。シャガールの「人がいっぱい空を飛ぶのは不思議じゃないだろう」と。「グレコの絵を見れば人が飛んでいるじゃないか」とも言われたことがあります。ずばり先生に言われて初めて、「あ、そんなものか、なるほど」と思ったんです。

これがシャガール的キュビスムという型で、顔とか実体はきちっとありながら、キュビスム風に画面を作っている。キュビスムって今西さんも言ったように、とにかく画面は雰囲気じゃなくて、がっちり構成されて構築されたものが絵であるということを確信を持っていらっしゃった。シャガールなんかもこういうキュビスム的で画面をきちんと構成するっていうか、そういう点では共通性あると思いました。先生もシャガールが好きだと言っていましたから。これはベラの結婚式の絵です。(6) こういうのは遠くのものと近くのものの対比になって、グレコの絵に相当似ています。そしてグレコの肖像画、すごくたくさんあるんですが、その中の1枚なんですが、特徴として、とにかくバックは1色、そして顔と手、そして右手のこういう形を描く。こういう絵がすごく肖像画でパターン化したぐらいたくさんあります。(7) 作家ってそういう目の付け所が面白いものだなと。野見山先生の絵を見ていると。絵描きは感激してものを描くわけですから、そういう引用までいちいち描くわけじゃないんですけど、自分が出会ったものの奥にあって、表には出ていないというか、そういうすごさが先生の一つの特徴じゃないかなと思っています。

田中：ありがとうございました。野見山暁治の造形的なところを、エル・グレコ、シャガール、セザンヌ等をおっしゃっていただいて貴重なお話でした。先生はこうした造形的なお話を大学でされるわけですか？

東京藝術大学教授のころ

上葛：まず学校でまったくしません。僕も4年間いて、先生から絵の批評を受けたのは2、3回しか

(6) マルク·シャガール《ワイングラスを掲げる二人の肖像》
1917–1918年　ポンピドゥー·センター蔵

(7) エル·グレコ《使徒聖シモン》1608–1614年頃
エル·グレコ美術館蔵

ないから。まあ、ここに同僚の寺田さんがいるんですけど、批評会でいろいろほかの先生方とやりあっていたって言っていましたけど、先生はほとんどそういう具体的なことは言いませんでしたね。だけど、先生の出身校へ絵の特別授業に行ったときは、親切におっしゃっていましたね。ああいう感じはまったく藝大ではゼロです。つまり、俺たちは絵描き同士なんだから、そんなこといちいち言わないってことだったんだと思っています。

田中：野見山さんがそういうお話をしないと、じゃあ、何を話していたんですか？

上葛：いつもはぐらかされていたような感じなんですけど、先生の場合は具体的に言うときはバチッと言っていたからね。禅問答的なことはなかったんじゃないですか。そして、先生はほとんど喋らなかったけど、文章に自分の絵のことをずばり書いているから、それも昔はそんなに書いていなかったと思うんですけど、後半90代くらいになると、そういう絵のことを具体的に書き始めていました。だから、先生もいつも言うように自分も迷っているんだっていうスタンスだった。だから、「絵はこうだよ」なんてすごく正直に書かなかったんだと思いますよ。書く人もいますけど、先生は最後の最後まで「絵はなんだ、絵はなんだ、どういうことか」というのを追い求めていたと思うんですよね。だけど、『眼の人 野見山暁治が語る』という本があるんですけど、その本を読んだりすると本当に具体的に絵のことを書いているんですね。だからやっぱり90歳くらいになって、一区切りして振り返って、自分のやってきたことに整理がついたのかなと思っています。藝大の時はまだ自分も絵描きでどんどん戦っていたんだから、そういうことをいちいち言えないよって感じでしたね。学生に対しても、もちろんここはどうだという具体的なことは言いましたけど、曖昧なことは言いませんでした。ただ積極的にアトリエを回るような人じゃなかった。例えばアトリエでみんながデッサンしていると、ある先生が入ってきて「はい、はい、はい」って次から次へと見ていくような先生もいましたけど、野見山先生はそういう見方じゃないから、気になった人には何か言っているという。だから片っ端から喋るようなタイプじゃなかったということです。気になった人には喋ったんじゃないかと。

田中：野見山先生はいろいろ本を書いてらっしゃいますけども、その中で教育者というのがあまりなじまなかったみたいですね。

上葛：ちょうど50歳代ですね、60歳で定年するわけですから。その中でベン・シャーンの画集の言葉にね、先生が書いているんですけど、あの文章は50歳代の反省文かなって時々思うんです。大学の先生をしていることで、俺は絵を描く時間、絵の枚数が減ったとか、すごく反省している文章があるんですよ。あれを読んだとき、これをもってやっぱりやめたんだろうなと思いました。それと嫌い云々じゃなくて、やっぱり朝早く大学に行くのが嫌だったんじゃないですか。

田中：めでたく東京藝術大学を退官されて、その後先生が80歳ぐらいの時から非常に制作に専念

されるようになったんです。ちょうどその時期に、山口千里さんは秘書と言ってよろしいんでしょうか。野見山先生に請われて秘書になられたんですか？秘書のお仕事っていうのはどういうことなんでしょうか？

晩年の制作と生活

山口千里氏（以下、山口）：

いや、それがですね、先生、やっぱり１人で仕事をされていたけれども、体調を壊してしまって、それで何度も展覧会の後の２次会とかで、倒れるんですよ。何かの病気で倒れるっていうよりも、やっぱり疲労で、お酒が誘引になってすぐ貧血を起こして倒れるっていうのが続いたんですよ。もう福岡は福岡で倒れる。東京は東京で倒れる。

それで、空港に先生をお迎えに行った時に、私は「先生、秘書を雇って、いろいろ仕事を采配してもらわないと無理ですよ」って言いました。その時は先生 80 歳ですからね。そう言った時に先生が、それはもう後で先生が私をからかうためにいつも言うんですけど、運転していたら「じゃあ、千里、秘書になってくれ」って言われたんですね。ところが先生ね、滑舌が悪いから「一緒になってくれ」って、私には聞こえたわけですよ。私は夫も子どももいるのに失礼な答えをしちゃいけないと思うから黙って運転していたら、先生もその時、「あれ、黙ったな」と思ったらしく、「ちゃんと給料も払うし」って言われて、「秘書か！」と思って。そういういきさつがあって先生のお世話をするようになったっていうんですか。仕事だけじゃなくて健康管理もしないと倒れちゃうから、すぐ病院を手配して入院だとかあるわけですよ。そうした時にお一人だとどうしても無理です。私は赤の他人ですから。先生の病状の説明だとか、今後の治療方針とかそういうのも一切わからないわけです。先生が聞いたってまったくわからないし、じゃあ弟さんにって言っても弟さんは福岡ですし、すぐ来てくれってわけにいかないから、それで「じゃあ、もうこの際、千里は養女になって全部そういう話も聞いてやってくれ」ということで、私は養女になったわけです。

田中：秘書になって、その後養女になった。

山口：それで最後も「全部任せるな」みたいな感じだったから、おかしいんですけどね、先生とね、「先生、万が一亡くなった時どういうふうにする？」って聞くわけ。２人で話し合っているわけですよ。よくね、偉い人を発起人としてこのようにお別れ会を執り行うとかあるけど、そういうのは一切やめようぜって２人で言っているわけですよ。で、その時に「友人代表は入江観、野見山暁治財団の上葛明広、この２名で行こう」みたいな。そんなことまで２人で話していたんです。

田中：生前に？

山口：はい。だから、「じゃあ先生、絵をどうしますか？」って言った時に、「間違っても、野見山暁治の美術館とか作るんじゃないぞ」って言われて、「えー！」とかって私が言いますとね、先生が「人は一度は見に来るだろう。だけど、そういう人が何年毎回も来るか」と。「美術館を建てるのはいいけれども、そのランニングコストがとてもかかります。だからこれはもう全国の国公立の美術館に全部寄贈してしまいなさい」と。やっぱり相当な枚数あったんですね。油絵の大作も 200 点以上ありますしね。ただし、ばらばらになってしまっちゃ困るから、中央は練馬区立美術館を柱とする。九州は福岡県立美術館を柱とする。だからそれぞれに 100 点以上の作品が入ったわけですよ。それを具体的に動くのに、私と今理事長ですけど、上葛さんと２人でどうしようかという時に、一応野見山暁治財団を立ち上げて財団でこれをやりましょうと。

田中：それは年譜によりますと、2016 年 95 歳の時に生前に財団を立てられたの？　そういう目的で？

山口：そうですよ。先生はすごく嫌がっていたの、寄贈するの。「寄贈したらどこも買ってくれない」って。だから寄贈は嫌だなって感じだったんですよ。でもね、そんなことを言って先生はいつまで生きるかわからないわけじゃないですか。残されたら遺族の方から何からみんな困るわけですよ。それもあって、だから本当はもうちょっと早く寄贈が済むと思ったんですけど、ちょうどコロナです。だから収集委員会がなかなか開かれなくて、それでもやりとりをしながら寄贈をした。でも各美術館の学芸員が、先生の生きてらっしゃる時に作品を取りに見えるんですよ。そうすると、一応野見山先生にご挨拶なさるんだけど、先生はぶ然としてるわけ。寄贈するのは嫌なんです。それで「はい、どうも」みたいな感

じでいたんですよね。

でも、寄贈したからといってそこでね、制作意欲が衰えるわけじゃないんです。そこからまたいっぱい作品を描いているんですよ。だから102歳で亡くなったんですけど、その時にもうすでに油絵が一番大きいのが80号で、あと20号ぐらいの作品が10何点できていましたから。まだ出来上がりじゃないんですよ、もうちょっとで出来上がるなっていうのがあって、その段階でサインを入れてタイトルを決めて、だから、最後入院してらっしゃる時に「先生、早く退院して個展をやろう」と言ったら、「そうだな、どこでやるか？」とかそういう話をしていました。だから、先生も最後入院した時に、よもや自分は亡くなっちゃうなんて思っていなかったと思います。

田中：先生の秘書としての目からご覧になる80歳以降の先生の生活についてお聞かせください。絵を描くと同時に、2003年には本当に多忙を極めるように、東京、大分、富山、愛知というふうに全国を巡回するような大規模な回顧展が開催されていますし、同時にこの年から美術雑誌に「アトリエ日記」という連載が始まっているんですね。そうしますと、執筆の方も絵を描くと同時に原稿も書かなきゃいけないわけです。その辺の先生の生活のリズムはどのようなものだったのでしょう？

山口：先生、いつも言ってらっしゃったのは、「絵は自分の気持ちのままに描けるんだ。だけど、文章は考えなきゃいけない」って。大体午前中から絵を描いて、お昼食べてちょっとお昼寝して、その後夕方までまた描きますよね。そうすると、5時過ぎぐらいからお散歩に出るんです。散歩って言っても住宅街ですから、本当に住宅街を徘徊しているみたいな感じで歩いて、その間に文章をまとめていくらしいんですよ。それで夕飯食べますね。その時には必ずグラス1杯の赤ワインを飲みます。それを2杯飲んじゃったら眠くなるからだめなんです。1杯飲んでその後原稿を書くんですよ。

田中：それはけっこう規則正しいものなんですね。

山口：それは規則正しく。だから「締め切りはいつなんだ？」って聞いて、締め切りに遅れたことは一度もないです。それは文章を書き出した時に、小説家の田中小実昌さん、義理の弟さんですよね。田中小実昌さんにどういうふうにしたらいいんだって言ったら、「兄貴ね、絶対に締め切りを先延ばししちゃダメだよ。ドミノが倒れるようにダダダダダといっちゃうから、絶対これは守らなきゃいけないよ」と。それを言われたって言っていましたね。だから原稿が遅れるということはないです。

田中：もう一つ伺ってよろしいですか？　野見山さんのそれこそ生活の場所ということでいうと、東京の練馬区内にアトリエがございますけれど、もう1か所、福岡県糸島にもとてもモダンなアトリエを持っていらっしゃいます。行ったり来たりされていたんですか？

山口：まず海に入りたいので、夏は必ず糸島です。シュノーケルしながら貝を採って、それを塩茹でして夕飯のワインのあてにして、毎日そっちは4時半ぐらいからお散歩に行くんですよ。お散歩というか、海へお散歩に行くんです。シュノーケルで潜って採って、それを毎日の日課として、雨の降っているときはだめですけどね。だから6月の終わりから9月の終わり、もしくは10月の半ばぐらいまでは糸島にいました。それでずっと9月いっぱいぐらい水に入っているんですよ。「昨日まで入れたから今日入れないってことはないだろう」とか言いながら入っていましたけど。私も一緒について行っていましたから、水の中はあったかいけど、外に出ると風が冷たくて、先生大丈夫かなと思いながら、そんな感じでした。あとは春先にちょっと行ってみたいなと思うと行くわけですね。そうするとね、わかめが岸辺に打ち上がってくるわけですよ。それを拾って帰っていました。

田中：自給自足？

山口：そんな感じですよね。わかめを茹でて食べるとかね。そういうのが大好きだったんですよ。あとつくし。関東の方は召し上がらないけど、九州とかはつくしを必ず食べるんです。アトリエのバルコニーの先につくしがびっしり出てくる、地面の上に出るので、それを採って、2人でつくしの袴を取りながら。そういうのも楽しみの一つです。

上葛：今の話に追加なんですけど、先生はタヒチに行くんですよね、奥さんと一緒にね。その時初めてシュノーケルを経験するわけですよ。初めは嫌々な

がら旅に行ったらしいんだけど、シュノーケルにはまって初めて海の中を見て、まあ浮遊するわけですよね。その時、海の中の風景というか、だんだんぼやけていく空間がね、モナリザのバックと似ているっていう文章があるんですよ。実体があるようなないようなそういうことで、相当自分が浮遊するというか、重力がない中でのものの動き方というんですか、あの辺からも一つ絵の変化が生まれていることを感じますけどね。

さっきのちょっと戻って一つ、山口さんが秘書になるっていう話ね。夜9時頃だったか、野見山先生から「山口千里を秘書にする。ガチャン（電話の切れる音）」って電話が来ました。

田中：山口さん、けっこう先生はわがまま言う方ですか？　そうでもない？　山口さんの言うことは聞いていたでしょう。

山口：私は幸いなことに、80歳からの晩年からずっと先生のお世話をしてましたでしょう。やはり上葛さんの時代は、先生お若いから怖かったとおっしゃるんですよ。私怖いことは一つもなくて、うちの先生の方が私をどうやら怖がっていたみたいで、私が糸島に大体2週間くらいいると、4～5日東京に戻るわけですよ。それでまた戻ってくるんですよ。その時、「今日は千里が帰ってくる」って怖がっていたって留守番の方が言っていました。

田中：お二人は野見山さんと非常にお付き合いが長いので、話は尽きないかとは思うんですけれども、これでひとまず対談を終わります。本日は貴重なお話をありがとうございました。

作品図版のご提供：上葛明広氏（野見山暁治旧蔵書、上葛氏蔵書より）

付記
この対談では、この後、会場にいらした伊東正伸様（練馬区立美術館館長）、加藤陽介様（同美術館主席学芸員）、さらに学生時代に野見山暁治に接した画家の寺田和幸様、同じく画家の貴堂静栄様より、貴重なコメントをいただきました。しかしながら、誌面の都合で載録できませんでしたので、お名前をあげて感謝の意を表します。

（田中 淳）

展覧会のご案内

いま、美術館にいるんだけど
―唐澤龍彦の〝コミック〟と大川美術館―

2026年7月18日（土）～9月13日（日）

桐生市在住のアーティスト・唐澤龍彦が描く〝コミック〟の世界と、大川美術館コレクションとの出会いから生まれた展覧会です。不思議な動物たちが美術館を訪れ、多彩な作品とおしゃべりします。

唐澤龍彦《つぎにとまるばしょ》2018年 作家蔵

［同時開催］

特集展示 シュルレアリスムの時代
The Age of Surrealism

シュルレアリスムは、1924年にフランスで始まった芸術運動です。本展では、大川美術館のコレクションからマックス・エルンスト、サルバドール・ダリ、ジョアン・ミロらヨーロッパの作家たちと、日本でその影響を受けた福沢一郎、三岸好太郎、北脇昇、瑛九らの画家たちをご紹介します。

また、個人所蔵家のご協力により特別に出品されるルネ・マグリット《Le Symbole dissimulé（隠された象徴）》（1928年作 油彩・カンヴァス）は、日本初公開となります。

編集発行　公益財団法人 大川美術館　〒376-0043　桐生市小曽根町3-69　TEL 0277-46-3300　FAX 0277-46-3350　URL.http://www.okawamuseum.jp